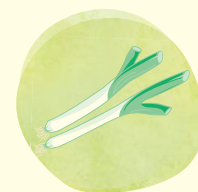


テクニカルダイアリー



令和2年度産の生育状況について

2020年は長梅雨で6～7月の降水量が平年より多く推移しました。そのため、年明け・春出荷用のネギの定植作業が遅れ、日照不足・湿害や梅雨明け後の高温・乾燥による生育不良が発生しました。また、9月中旬まで高温が続いたことから、夏越し後の土寄せ作業が遅れたところもあり、圃場によって作柄に差が出ています。前述のような生育環境により萎凋病や軟腐病が発生し、年内出荷の圃場に欠株が多く見受けられました。

今後の病害対策

これからは、気温が20℃を下回るため、葉枯病、黒斑病、さび病などの発生に注意が必要です。対象となる病害に合わせて、表①を参考に適期防除を心掛けてください。

①葉枯病・黒斑病(写真①)

葉枯病・黒斑病ともに15～25℃が発病適温で、春から秋まで発生期間が長い病害です。葉枯

植え付け準備

種芋が届いたらムレや腐敗を防ぐため、できるだけ速やかに開封しましょう。痛み、変色、腐敗を発見したら、すぐに取り出して風通しの良いところで保管してください。

種芋は大きいほど初期生育が良く、茎数が増え、芋数が多くなりますが、60g以上になっても収穫差はあまりなく、1片の大きさが40～60gで2～3個の芽がつくように切断してください。切り分けた種芋は風通しの良い日陰で乾かしましょう。

黒あざ病(写真⑤)予防のために、アタッキン水和剤(40倍)／5～10秒間種芋浸漬／種芋切断前に処理)やバリダシン粉剤D L(種芋重量の0.3%を粉衣／種芋切断後、切り口が乾いてから処理)を使用しましょう。

圃場準備および植え付け

土壌pHが高い圃場では、収穫時の芋にそうか病が発生しやすいところ(6.5以上)では作付けを控えるか、石灰質肥料を控えま

病は、主に外葉で葉先枯れや葉枯症状が発生します。また、外葉の葉枯病菌が伝染し、中心葉に黄色斑紋病斑が表れ、出荷物の品質に影響する恐れがあります。

黄色斑紋病斑(写真②)は、15～20℃のやや低い気温と多湿で発生しやすいです。曇天や土寄せで根が切れることによる草勢の低下や、掘り遅れによる老化も発生を助長します。



写真① 黒斑病

写真② 黄色斑紋病斑

②べと病(写真③)

べと病は気温が20℃以下になり、湿度が高い状態(降雨、霧が

発生しやすい状況)で発病しやすい病害です。このような気象が予想される場合、効果の高い薬剤を定期的に散布し適期防除に努めましょう。



写真③ べと病

③さび病(写真④)

さび病は気温が17～23℃で多湿の場合に発生しやすい病害です。発病後の治療が難しいため、発病初期に薬剤散布を行うことが重要です。



写真④ さび病

しよ。

施肥前には、土壌診断をお薦めします。施肥は表②を参考にしてください。「畑のカルシウム」は、品質向上、増収効果を目的とした土壌改良剤です。pHを上げずにカルシウムを補給でき、施用すると茎葉が丈夫になり、芋数が増えると好評の石灰質肥料です。

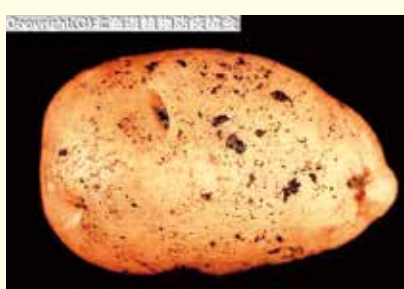
病害虫防除

植え付け前には、ネキリムシ類の防除として、ダイアジノン粒剤5(6キ／10ア)を施用します。植え付けは畝幅90センチ、株間25～30センチ、深さ10センチ程度とします。深すぎると、出芽が遅れてしまふので、覆土のかけすぎには注意してください。

そうか病の発生が懸念される場合には、クロールピクリンなどの土壌消毒剤とあわせて、ネビジン粉剤(6キ／10ア)／植付時／全面土壌混和／1回)または、フロンサイド粉剤(30～40キ／10ア)／植付前／全面土壌混和／1回)を施用してください。雑草の発生が多い圃場では、植え付け後に除草剤のゴーゴーサン乳剤を散布しましょう。

バレイショ栽培において、最も問題になるのは疫病(写真⑥)です。疫病は、葉に褐色の病斑が生じ、その後、水浸状に拡大します。病斑の裏面や健全な部分との境目に白いカビが発生します。多湿で発生し、急速にまん延し、短期間で茎葉が枯死します。芋の肥大初期に発病すると減収を招く恐れがあるので、早期発見と予防を中心とした防除を行います(表③参照)。

バレイショ栽培において、最も問題になるのは疫病(写真⑥)です。疫病は、葉に褐色の病斑が生じ、その後、水浸状に拡大します。病斑の裏面や健全な部分との境目に白いカビが発生します。多湿で発生し、急速にまん延し、短期間で茎葉が枯死します。芋の肥大初期に発病すると減収を招く恐れがあるので、早期発見と予防を中心とした防除を行います(表③参照)。



写真⑤ 黒あざ病



写真⑥ 疫病

表② 施肥例

肥料名	成分	施肥量 (10a当たり)
さんぶジシアン有機特806	8-10-6	200kg
苦土重焼燐	0-35-0	40kg
畑のカルシウム	カルシウム28.5%	100kg

表③ 疫病の防除薬剤(2月下旬植え付けの場合)

散布時期	薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数
4月下旬	リドミルゴールドMZ	500～1000倍	収穫30日前まで	1回以内
5月中旬	レーバスフロアブル	1500～2000倍	収穫7日前まで	2回以内
6月上旬	プロポーズ顆粒水和剤	750～1000倍	収穫7日前まで	5回以内

上記薬剤に加えて、降雨が続く場合は、ダイナモ顆粒水和剤(2000～3000倍、収穫7日前まで、4回以内)を散布。

表① ネギに登録のある薬剤

薬剤名	べと病	黒斑病	葉枯病	さび病	希釈倍率	使用時期	使用回数
アミスター20フロアブル	○	○	○	○	2000倍	収穫3日前まで	4回以内
メジャーフロアブル	○	○	○	○	2000倍	収穫前日まで	3回以内
テーク水和剤	○	○	○	○	600倍	収穫14日前まで	3回以内
プロポーズ顆粒水和剤	○		○		1000倍	収穫14日前まで	3回以内
オロンディスウルトラSC(※)	○				2000倍	収穫7日前まで	2回以内
ファンタジスタ顆粒水和剤		○	○	○	3000倍	収穫7日前まで	3回以内
ポリベリン水和剤		○	○		1500倍	収穫14日前まで	3回以内
カナメフロアブル(※)		○		○	4000倍	収穫前日まで	4回以内

(※) 昨年登録(拡大)になった新剤。

(注) 使用にあたっては必ずラベルを確認ください。

11月の分析経過について		
合計14点		
残留農薬分析点数	多成分一斉分析	越冬キュウリ……2点
		秋冬ニンジン……3点
		秋冬ネギ……7点
		ニラ……1点
		エコ米……1点

※残留農薬分析において、基準値を上回る成分は検出されませんでした。

土壌診断点数……合計50点